

マイスター・ハイスクールだより

「マイスター・ハイスクール事業」成果発表会を開催

令和6年12月17日(火)、事業3年目の研究成果のまとめとして、成果発表会を北海道厚岸翔洋高等学校で開催し、会場とオンラインを合わせて120名を超える方々が参加しました。

成果発表会の進行は、3年生の河越さんと貫和さんが務め、開会に当たっては、本校の山本十三校長が「地域の産業における課題と向き合い、その解決に向けた調査研究を行い、その成果の発信、フィードバックをとおしてなされてきた学びが、これからの未来を切り拓いていく力になると確信しています。これまでの成果を大いに発信してください。」と生徒に呼びかけました。また、厚岸漁業協同組合の蔵谷繁喜組合長は「この取組は、一過性のものではなく、今後も地域の発展に寄与していくものと期待しています。」と述べられました。

その後、マイスター・ハイスクール事業で取り組んだ内容や、生徒と地域や産業界の方々とのパネルディスカッションが行われました。



山本校長



蔵谷組合長

取組概要についての説明

【事業テーマ】地域の未来を創るマリン・イノベーターの育成 ～IT導入による持続可能な地域社会の創造～



【調理コース3年】佐藤さん、新濱さん

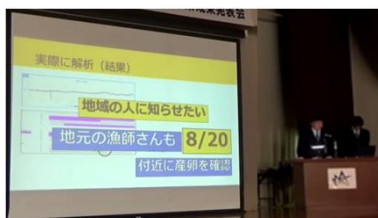
海洋資源科調理コースの生徒2名から、入学して間もなく、和田雅昭CEOの講演を聴き、スマート水産業について初めて知ったことや、3年間の経過について、次の3つの柱に沿って説明がありました。事業2年目に開催された「全国豊かな海づくり大会」→



生徒が、大会旗入場では旗手を務めたほか、企画展示ブースでは事業の周知活動を行いました。

テーマ（柱）別発表

柱1 水産資源の持続化に向けた取組



【生産コース3年】坂本さん、横川さん

- 【1・2年目】
・スマートフイ、うみログなど海洋観測機器についての学び、応用に向けての下地づくり
【3年目】
・機器の活用等について漁業者と意見交換
・「牡蠣の産卵日を予想できないか」という地域の要望
・機器の活用による予測、産卵日の中
・スマート機器の有用性について実証、地域からの理解を得る



柱2 漁家経営の持続化に向けた取組



【生産コース3年】櫻庭さん、山本さん

- 【1・2年目】
・水中・空中ドローン活用による、省力化、コスト削減等についての学び
・漁業者等との意見交換
【3年目】
・ホタテ漁場の資源量マップ作成
・Googleアース活用でのデータ共有、見える化
・人材不足解消に向け、漁業の魅力化
・大漁に貢献、漁業者の伝統的手法とスマート水産が結びつく



柱3 地域産業の持続化に向けた取組



【生産コース3年】笠間さん、田端さん

- 【1・2年目】
・3割以上捨てられるというアメカマのかまぼこ化模索（「あめかま」の開発）
・海づくり大会の公式弁当メニュー考案
・あめかまの改良
・牡蠣の商品開発、STVやコープさっぽろとコラボ、全道に発信
【3年目】
・「あめかま」ふるさと納税返礼品化
・灯台つづを活用した商品化の検討



生徒と地域や産業界によるパネルディスカッション

生徒4名と地域・産業界から3名のパネラーが参加し、「マイスター・ハイスクール事業での学び」、「学校と地域との関わりで気付いたこと」、「厚岸町の未来」をテーマに、パネルディスカッションを行いました。



生産コース
坂本さん



調理コース
石井さん



厚岸漁業協同組合
林 亮太 氏



厚岸観光協会
(産業実務家教員)
安藤 義秀 氏



生産コース
櫻庭さん



調理コース
溝畑さん



株式会社大歩
中村 徹也 氏



ファシリテーターは
事業伴走者の月館
海斗氏



牡蠣の産卵日予測(積算温度算出)については、漁業者からの声があり、取り組むことになりました。分析するのは大変でしたが、様々な方々からアドバイスをいただき、探り探り取り組みました。

ベテランの漁業者は経験値に基づくことが多い一方、若い漁業者はICTに慣れ親しんでおり、スマート水産業への理解がスムーズに進みました。また、本事業をとおして、地域のスマート水産業への理解は、高校生がやっていることが抵抗なく受け入れられたこともあり、10年かかることが3年でできたのではないかと印象を受けました。



漁業者の効率化・省力化をねらいとして、ドローンによるホタテ資源量マップの作成を行いました。作業は大変でしたが、漁業者が使える段階までもっていくことを考えるのがモチベーションになりました。

ドローンの操作はやればやるほど上手になっていきました。データについては、スマートTVなどを通じて町や漁協に情報共有ができていますが、せっかくよい取組をしているので、水産離れている小学生や中学生にも意義や楽しさを伝えていければよいと思います。



先輩方が全道に発信してきた地元の食材(牡蠣)の活用について、思いを引き継ぎながら商品開発に取り組みました。



大学に進学してしまうので、「あめかま」をふるさと納税返礼品にして町に貢献することができてよかったです。

地元の人は「食べない」「美味しくない」魚を3年かけてブラッシュアップして、地域の販売ですぐに完売するような「あめかま」が仕上がりました。すぐにふるさと納税返礼品になったわけではなく、地域と一緒に「あめかま」を育ててきたのだと思います。スマート水産業にしても、その有用性が地域とともに実証できたことが一番の成果です。



ICT化は人の仕事を奪うと思われることもありますが、経験値と技術を掛け合わせることで、理解が得られたり、人の助けになるものだと思えました。



ICT化はなかなか理解されないと思っていましたが、意見交換を重ねることで、地域の方々は、むしろ積極的にサポートしてくれるようになり、私達が取り組んできたこと以外にも何かできないかと模索してくれるようになりました。

最後に、パネラーの生徒達からは、「それぞれの進路は異なるが、それぞれが進む分野においても、漁業や水産物に関わる取組を行っていきたい。」「これまでの経験を生かして、地域との関わりを持ち、人のサポートができるような仕事をしたい。」と今後への決意が語られました。

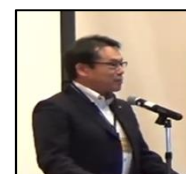
また、月館氏から、「この事業の取組をとおして、生徒達は地域のこと、日本のことを考えることができるようになった。和田CEOや株式会社大歩の中村氏など、厚岸町以外から事業に参画された方もいたように、北海道が一つとなった取組ができたのではないかと締めくくられました。

閉会式（まとめと講評）

閉会式では、CEOの公立はこだて未来大学 和田雅昭教授と北海道教育委員会 中島俊明教育長からまとめと講評がありました。和田教授は、「3年生は、マイスター・ハイスクールのない高校生活は考えられなかったのではないかとというぐらい、この事業が日常に溶け込んでいた。これからの社会を支えるのは皆さんであり、進んだ先々において、これまで学んできたことを大切にしながら歩んでほしい。生徒も先生方も急成長した3年間だった。」とまとめ、中島教育長は、「生徒の皆さんの発表からは、地域が何を考え、何が課題かを明らかにし、社会と学校が切れ目なくつながった様子が手に取るように伝わった。また、マイスター・ハイスクール事業の学びを通じて、生徒全員が自身の成長を実感していることが分かり、頼もしく感じた。今後も、学びの中で課題を見つけ、考える姿勢をもち、たくましくその課題を乗り越えてほしい。」とエールを送りました。



和田CEO



中島教育長